

〔書評と紹介〕

七戸町教育委員会編

『中世糠部の世界と南部氏』

工藤 弘樹

本書は、七戸町制施行百周年を記念して、「歴史の中の七戸」というテーマで開催されたシンポジウムの記録である。以下に、その内容を記す。

第1部 歴史の中の南部氏

日本史の中の南部氏

中世七戸から見た南部氏と糠部

発掘された七戸城

七戸城北館の役割

第2部 発掘 中世南部氏の城館

本三戸城跡(聖寿寺館跡)

種里城跡

一戸城跡

九戸城跡

盛岡城跡

鍋倉城跡

浄法寺城跡

南部氏城館の実像

入間田宣夫

市村 高男

小山 彦逸

佐々木浩一

永井 治

中田 書矢

中村 明央

関 豊

室野 秀文

佐藤 浩彦

中村 裕

飯村 均

第3部 中世糠部の歴史的背景

縄文から古代にかけての七戸

蝦夷時代における七戸地方について

戦国南部氏雑考

村越 深

盛田 稔

遠藤 巖

第1部は、シンポジウム当日の講演・報告の内容をもとに構成されている。まず、入間田氏が糠部という空間軸、市村氏が南部氏という時間軸について、文献史学の成果を中心にそれぞれの論を展開している。そして、七戸城の発掘成果について小山氏が、更に、発掘成果にもとづく分析を佐々木氏が担当し、シンポジウムの舞台となった七戸城の歴史に切り込む。本書の中で、中核を占めるのが第1部であり、表題である『中世糠部の世界と南部氏』の歴史について多面的に編集されている。

第2部では、七戸城以外の南部氏関係の城館について、発掘担当者による成果の報告がなされている。また、飯村氏による南部氏の城館とされる遺跡に対するコメントが、発掘成果を理解するための方向性を示唆してくれる。

第3部は、中世糠部七戸を理解するために、中世以前の遺跡の鳥瞰的考察を村越氏がおこない、この地域の特色を知るうえで重要である馬産との関わりについて、盛田氏が論述している。また、遠藤氏は、七戸に関わる数少ない中世文献史料を提示、検討を加えているが、七戸に限らず周辺領域まで含めて、今後の歴史学の指針を示している。

以上のように、本書は、多様かつ豊富な内容で構成されているため、すべての内容に対して論評を加えることは、筆者の能力では不可能である。そこで、文字通りの『中世糠部の世界と南部氏』に関わる論考に対

して、拙い寸評を加えることで、書評の任にかえることを、御了承いただきたい。

入間田宣夫氏は、糠部に足跡を残した人々の顕彰をおこなうことで、この地域の多彩な人間構成について明らかにした。

今回、入間田氏は、南部氏の家臣・一族について、「津軽郡中名字」を始めとする史料を検討し、南部氏の北奥地域における覇権掌握が、鎌倉北条氏の遺産に依拠する部分が多かった事を指摘している。糠部のみに限らず、北奥地域には、北条氏の所領が広がっていた。当然、所領を掌握するための現地での代官が必要になる。北条氏の被官（または、その代官）が糠部などの北奥に派遣されていたはずである。鎌倉時代、北条得宗家との関係を密にし、得宗被官としての性格を強めていたと考えられる南部氏を、建武新政権が、北条氏残党の多い北奥に派遣して、検断奉行としたことは、十分あり得るし、北条氏の被官など、多くの人々との「密接な交流のなかで醸成された」結果として、南部氏が北奥での覇権を握ったという考えは、妥当であると考えられる。

また、従来、糠部は、馬産と結びつけて考えられることが多く、多様な人間構成が等閑視される傾向にあった。この事に批判を加え、海民の存在に目を向ける必要性を指摘している。考えてみれば、糠部は、三方を海に囲まれ、その海は、外洋・海峡・内湾という、異なった姿を見せる。そこに住む人々の生活に大きな影響を与えていたはずである。そのことに注目したのは、入間田氏の視野の広さと柔軟な思考によるものと思える。ただし、南部氏が海を掌握をして、「パックス南部」を目指し

た（行った）というのは、にわかに賛同できない説である。なぜなら、十三湊陥落の後も、津軽で、失地回復の戦いは行われているし、下国安藤氏嫡流義季の死が享徳二年で、傀儡としての師季（政季）が南部の支配から抜けようと北海道に渡ったのが、享徳三年八月。長く見積もっても二〇ヶ月。この時間を、どのように評価するべきか。この部分に関しては、更なる議論が必要であると考ええる。

次に、市村高男氏は、北方史研究の太平洋側からの研究の遅れを指摘し、北方史の中での糠部七戸南部家の位置づけについて論じている。

市村氏は、三戸（盛岡）南部家と八戸（遠野）南部家の系図を総合的に見直し、そこから考えられることを五点導き出している。その中で、従来「通説」とされてきたことへの疑問や、三戸・八戸両南部家の代替わりが、「一見平和的」に見えるが、その背景には権力闘争などが隠蔽されているという可能性を指摘している。盛田稔氏や吉井功児氏など、従来から南部家の家系に対する疑問は様々示されていた。しかし、このことは、「南部氏や糠部の歴史」において、「通説」として定着できない部分であった。今回、中世史専攻の市村氏が、両南部家の系図についての見直しを実施し、「中世南部氏に関する事実の最大公約数」として提示されたことは、この方面の研究見直しの上で、大きな成果であると思う。ただ、南北朝期の七戸南部家と八戸南部家の関わりを考察している部分は、もう少し視野を広げて、三戸（盛岡）南部家などの活動と組み合わせれば、更なる事実が浮かび上がるのではないかと印象を受けた。それから、市村氏は、七戸南部家の位置づけとして、「北の押さえ」を行っていた、という内容のことを提示している。しかし、この場

合の「北の押さえ」とは、糠部を含む南部領の「北の押さえ」なのか、中世国家の「北の押さえ」なのか、明確に示されていない。少なくとも文脈からは両方の意味を読み取ることができる。この部分は、室町幕府体制下の安藤氏の評価や同体制の中での奥州探題と南部諸家の歴史、奥州探題と安藤氏の立場などとも関わる部分であると考ええる。中世史の研究者が、七戸南部家をどのように評価するか、今後の研究の深化が求められると考える。

続いて、本書の中核になると考える、小山彦逸氏と佐々木浩一氏による、七戸城の発掘成果と考察についてである。実際に地元での発掘を担当されている小山氏によると、中世、実際に中心となった曲輪は、北館であったという事が明らかになったという。また、使用された時期は、一四世紀末～一六世紀末までの約二〇〇年間であることが、出土遺物などからわかったという。七戸城に関する新知見である、北館主郭説を始めてとして、地域に根ざして、発掘・考察を行っている小山氏の発言だけに重みを持つと思う。しかしながら、城と村落の模式図に関しては、特に中世の場合は、地域と地域の関係や領主権力の関わり方など、重層的になる部分が多いため、平面的な模式図だけでは、本来、主張したいことまで曲解されかねない。実際、本書の第9図と第10図について、関係の説明を求められたとき、どのような関係になるのか、疑問が残る点である。続いて、佐々木氏は、八戸市根城の発掘経験や自ら提唱する、城郭の形態論をもとに、北館の役割について言及されているが、考古学的成果をもとに、北館には、主殿・常御殿・奥御殿に比定できる建物が存在していた可能性を指摘している。これは、小山氏による報告とも一

致する部分であり、中世の南部氏史や糠部史の中での、七戸城の重要性を示すことになっている。

最後になるが、遠藤巖氏による「戦国南部七戸雑考」について。遠藤氏は、本書の主舞台となる七戸とその領主に関連する、①櫛引八幡宮神社次第日記、②南部信長書状、③波岡天文記、の三点の史料について解説し、少ない文献史料に基づいて歴史考察をする者への指針を示している。なかでも、年欠文書である②南部信長書状について、内容の分析と、様々な同時代史料から、従来までの文明年間説を永禄七年頃と論証された。南部氏に関する系図の粉飾の多いこの地域において、存在と年代を明確に知ることのできる南部氏一族を確認することができるわけ、南部や糠部の歴史を学ぶ者にとっては、大変ありがたいことである。また、本書の中心論題からは多少離れるが、『古川記』などの申状などとの比較・検討から、『奥州余目記録』で、従来「しゆくのこほり」と読んで、意味不明としてきた部分を「しゆん（駿）のこほり（郡）」と解釈されたことは、長年中世北奥史に取り組んできた、遠藤氏の卓見であると考ええる。「駿」とは、「すぐれたる馬の美称」という意味をもち、名馬の生産地である糠部の異称としては、極めて当を得ていると考えられる。

以上、本書について、始めにお断りした通り『中世糠部の世界と南部氏』についての内容紹介と勝手な感想を記してみた。

南部氏と糠部の歴史については、まだまだ未解明のことが多い。加えて、個別研究のみの観があった。今回、それが一冊になって、世に出さ

れたことは、大変有意義なことであると考える。

(高志書院、A5判、二一七ページ、本体二五〇〇円十税、

二〇〇三年三月刊)

(くどう・ひろき 青森県史編纂グループ)